

〈研究ノート〉

鳥取大学における中国語教育について

崎原麗霞・郭伏良

The Chinese Language Education in Tottori University

SAKIHARA Reika, GUO Fuliang

キーワード：中国語教育，中国語研修，中国語検定，指導力，キャリアアップ

Keywords : Chinese language education, Chinese language training, Testing Chinese Proficiency, Leadership, Career progression

1. はじめに

大学教育、学士課程教育における外国語教育、特に初修外国語教育の位置づけは長らく関心を集めた問題の一つである。2006年度に教養教育改革が行われて以来、初修外国語教育においては様々な変化が起こり、また、近年、世界情勢の変化に伴い、中国語への需要の集中傾向が見られるようになった。大学における初修中国語教育に関する先行研究として、興水優(2005)『中国語の教え方・学び方 - 中国語科教育法概説 - 』、郭春貴(2007)「大学における第2外国語の中国語教育の位置づけ」、『東北大学の初修外国語教育 CAHE TOHOKU Report39』(2012)、郭春貴(2014)「対日漢語教學的突破口」、胡金定(2014)「日本的漢語教育現状」などがあげられ、大学教育における初修中国語教育の現状(学習者数、クラス編成、学習目的、学習者ニーズの多様化への対応等)について考察が行われていた。先行研究を踏まえながら、本稿は鳥取大学における中国語教育について検討を行う。

昭和24年に設置された鳥取大学は学士教育として、「地域学部」「医学部」「工学部」「農学部」の4学部と、大学院は「地域学」「医学系」「工学」「農学」そして「連合農学」の各研究科を設置し、それぞれに博士前期課程(修士課程)と博士後期課程(博士課程)を設けており、教育研究を行っている。2015年現在、地域学部学生数は889名、医学部は1299名、工学部は2014名、農学部は1070名、学部学生数の合計は5282名であり、大学院学生数は349名になっている。また、大学院は外国語の科目は設置されておらず、学部生を対象に開設された外国語科目には、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語、スペイン語が数えられる。そのうち、初修外国語はドイツ語、フランス語、中国語、韓国語、スペイン語である。

初修外国語の履修状況として、「ドイツ語基礎Ⅰ・Ⅱ」が9クラス、「フランス語基礎Ⅰ・Ⅱ」が5クラス、「中国語基礎Ⅰ・Ⅱ」が12クラス、「韓国語基礎Ⅰ・Ⅱ」が6クラス、「スペイン語基礎Ⅰ・Ⅱ」が4クラス開催され、また、語学基礎科目は全学の新一年生を対象としている。そのほか、基礎を習得した2年生を対象に、「ドイツ応用Ⅰ・Ⅱ」が1クラス、「フランス応用Ⅰ・Ⅱ」が1クラス、「中国語応用Ⅰ・Ⅱ」が3クラス、「韓国語応用Ⅰ・Ⅱ」が2クラス開講されている。さらに、3年生以上、それぞれ学習してきた外国語科目に興味のある学生を対象に、自由単位として、「ドイツ語上級Ⅰ・Ⅱ」、「フランス上級Ⅰ・Ⅱ」、「中国語上級Ⅰ・Ⅱ」、「韓国語上級Ⅰ・Ⅱ」、「スペイン語上級Ⅰ・Ⅱ」がそれぞれ1クラス開設されている。また、初修外国語のうち、中国語の学生数は約600名になっており、トップを占めている。

2. 中国語科目内容

中国の公用語（普通話）は、日本では「中国語」とネーミングされており、日本に比較的近い地域で広く話されている言語であり、同じく漢字を使う言葉でもある。また、中学校や高校で漢文を学習した経験のある日本人にとって内容も理解しやすいようにみえる。しかし、話しているのを聞くと全く聞き取れない。それが中国語は外国語だと実感する瞬間である。実は、音の響きだけでなく、漢字だから理解できると思われた文章も、単語や文法など日本語とはかなり異なっている。そのため、中国語学習の注意点として、その外国語らしい音の響き、歌うような抑揚に耳を傾けることが大事であるといわれている。

1) 「中国語基礎Ⅰ・Ⅱ」

中国語を最初に受講する科目である。講義において、パソコン入力に威力を発揮するピンイン、中国語基礎会話力並びに文法基礎知識等を総合的に学びながら、中国の文化、風俗習慣にも触れていく。学習を通して、会話能力を身につけ、中国語入門という大切な第一歩をしっかりと踏み出すことを目標としている。半期1単位。16コマ。32時間数。

2) 「中国語応用Ⅰ・Ⅱ」

1年次に学習した「中国語基礎Ⅰ」「中国語基礎Ⅱ」を踏まえ、中級程度の表現を学ぶ。会話能力を高めながら、中国の社会・文化事情に対する理解を深め、中国語コミュニケーション能力の養成を図る。そのため、言語学習に限らず、一般中国人の思考様式、行動パターン、生活習慣、価値観なども豆知識として講義に織り込み、充実させる工夫を行っている。半期1単位。16コマ。32時間数。

3) 「中国語上級Ⅰ・Ⅱ」

「中国語基礎Ⅰ・Ⅱ」「中国語応用Ⅰ・Ⅱ」を受講した後、実力をさらにアップしたい学生が受講できる科目である。医学部を除く全学の学生を対象とする。グローバル化社会に対応できる中国語運用能力の養成を目標とし、なお、中国語検定試験3級の受験学習に取り組み、資格の取得を目指す。半期1単位。16コマ。32時間数。

3. 中国語履修方法

1) 「中国語基礎Ⅰ・Ⅱ」について

全学の新生を対象に、前期、後期ともにクラスが指定されており、中国語を母語・公用語とする学生は受講できないことになっている。

2) 「中国語応用Ⅰ・Ⅱ」について

医学部生命科学科、保健学科を除き、「中国語基礎Ⅰ・Ⅱ」を1年次において受講した後、2年次で受講する科目であり、中国語を母語・公用語とする学生は受講できない。

3) 「中国語上級Ⅰ・Ⅱ」について

「中国語応用Ⅰ・Ⅱ」を受講した後、3年次から受講できる科目である。卒業に必要な単位には含まれていないが、自由単位として成績が評価され成績証明書に記載される。中国語を母語・公用語とする学生は受講できない。

4. 中国語開設状況

中国語を履修する学生数は次のようになっている。「中国語基礎Ⅰ・Ⅱ」は必修選択科目であり、履修学生数は500名前後で推移している。担当教員として、専任教員一人、非常勤4名（台

湾出身一名、中国大陸出身2名)が携わっている。また、「中国語応用Ⅰ・Ⅱ」について、地域学部は必修選択になっており、現在約120名の学生が受講している。他の学部の学生は自由単位となり、興味のある学生20名前後が履修している。教員は日本人非常勤講師一人、専任教員一人が担当している。「中国語上級Ⅰ・Ⅱ」は自由単位であり、履修学生数はここ数年一桁で推移している。なお、再履修に関しては、「中国語基礎Ⅰ」また「中国語基礎Ⅱ」を単位修得できなかった学生は「中国語基礎Ⅰ」「中国語基礎Ⅱ」を、どのクラスでも受講可能である。「中国語応用Ⅰ」「中国語応用Ⅱ」を単位修得できなかった学生は「中国語応用Ⅰ」「中国語応用Ⅱ」を、どのクラスでも受講可能である。なお、2009年から2015年度の中国語履修者数を以下にまとめる。

中国語履修者数(2009年-2015年)

年度	中国語基礎Ⅰ・Ⅱクラス数 (年間履修者数)	中国語応用Ⅰ・Ⅱクラス数 (年間履修者数)	中国語上級Ⅰ・Ⅱクラス数 (年間履修者数)	延べ履修者数
2009	26 (1062人)	8 (290人)	未開設	1352人
2010	24 (1278人)	6 (239人)	未開設	1517人
2011	24 (1217人)	6 (318人)	2 (13人)	1548人
2012	24 (1126人)	4 (122人)	2 (10人)	1258人
2013	26 (956人)	6 (236人)	2 (6人)	1198人
2014	26 (908人)	6 (202人)	2 (4人)	1114人
2015	26 (926人)	6 (246人)	2 (4人)	1176人

鳥取大学において、初修外国語として中国語を履修学生は2010年、11年にピークに達し、12年から少しではあるが減少し始めた。減少の原因は定かではないが、ここ数年、日中関係がぎくしゃくして、国民の間に誤解や偏見が存在していることは事実である。それが一因となり、日本人大学生の中国語学習意欲にマイナス的に働きかけているのではないかと思われる。また、中国語上級クラスでは数名の学生だけが履修しているのも心苦しい状態である。要するに、1年次や2年次で単位を取得した後、中国語は完全に切り捨てられているように見える。これは鳥取大学だけに限らず、日本の大学全体によく見られる現象であり、初修外国語が「単位教育」として取り扱われた結果でもある。ただ、幸いなことに、履修者減少傾向は2015年度に若干改善している兆しがみられる。また、最近の中国人観光客による「爆買い」(近年、日本を訪れた中国人観光客が高額商品から日用品まで様々な商品を大量に買いあさる様子をいう。また、中国側のメディアによると、2015年2月春節期間中、日本を訪れた中国人観光客は45万人にの

ぼり、「爆買い」消費額は66億元（1140億円）を記録したという）が、日本の企業に多くのビジネスチャンスをもたらすと同時に、2014年に入り免税店の店舗数が急増し、4月1日時点では5777店であったが、2015年4月1日時点では約3倍の1万8779店（対前年比225.1%増）となったという。ビジネスチャンスの拡大や免税店の増加等に対応する中国語のできるスタッフのニーズにこたえるため、中国語学習の必要性に迫られて勉強を続ける学生が増加することを期待している。むろん、現在、日本では、初修外国語としての中国語教育に関しては、統一した教育目標が定められているわけではないため、それに合わせた教育指針もないままの状態が続いている。日本の各大学における高等教育の一環として、大学初修外国語としての中国語入門、初級、中級（応用）等々に関して、統一した詳細な指針の策定およびそれに合わせたテキストの編集、教育法の確立、日本人学生の特徴を熟知している中国語教育者の輩出が今後の課題であり、その解決を期待している。

5. 中国語研修の実施

多くの日本人学生にとって中国語はツールであり目的地ではない。ゆえに中国語を学ぶというより、中国語を通して学ぶ。つまり中国を理解する入口として中国語を使いながら勉強するという方法も考えられる。そのような学習のニーズに合わせて、鳥取大学では2007年度から夏休みを利用して2週間の日程で中国の大学と学術交流を結ぶ協定校において、中国文化体験及び中国語学習を主な内容とする中国語研修を実施し始めた。東北農業大学で行われた最初の研修には全学から15名の学生が参加した。2010年から2012年までは中国の河北大学で実施をし、それぞれの年に全学から学生9名、12名、11名が参加した。2013年度は北京林業大学で実施し、全学から学生10名が参加した。

5年間にわたり5回実施したこの研修プログラムには延べ47名の学生が参加した。2週間だけの研修プログラムなので単位の認定はなかったが、「中国語で話す度胸がついた」、「見聞を広げた」など、毎年高評価を得ていた。帰国後、研修に参加した学生のうち、毎年1、2名の学生が河北大学に語学留学を申し込み、2014年度までに6名に達した。約1年間の語学留学期間中、1学期目は「中国語文法」「中国語作文」「中国語精読」「中級中国語リスニング・スピーキング」「中級中国語読解」、2学期目は「中国語文法」「新聞読解教程」「上級中国語会話」「上級中国語総合」「古文中国語」「上級中国語作文」「中国語音声訓練」といった科目を通じて学習を展開したという。そのうち、4名の学生が語学留学期間中、中国政府公認の中国語資格HSK（漢語水平試験）を受験し、最高級の6級に合格した。

2014年度からはプログラムの充実を図り、協定校の台湾銘傳大学で全日程3週間、総学習時間51時間にのぼり、海外実践教育に関する科目として1単位認定する中国語研修プログラムを立ち上げ、全学に参加を呼び掛け、8名の学生が参加した。本研修プログラムは、「豊かなグローバルマインドを根底として、グローバル人間力、グローバルリテラシー、グローバルコミュニケーション力をグローバル基礎能力とするグローバルマネジメント能力とタフで健全な心身を有し、深い専門知識（理論）と高い技術力（実践力）を体系的に修得することにより、進歩しつつあるグローバル社会の中核として活躍できる人材の育成」を目指すものである。中国語の実践的な運用能力を磨くとともに、文化交流を通じて、台湾の歴史や文化理解を深めるこのプログラムは、「海外実践教育に関する科目」（1単位）の単位取得が可能である。

プログラムの達成目標として、①グローバルマネジメント（外国人との共同作業に参加して

チームの一員としての自覚をもって自分に与えられた任務は遂行できること), ②自己開発・強化力(自分のありたい姿を明確に定め, その実現のために努力を継続すること), ③自己管理能力(異なる環境で与えられた任務を自己責任で判断して最後まで遂行するタフさを持つこと), ④文化・社会発信力(グローバル社会に向けて日本の文化・社会的資源, 価値観等を伝えるために知識と能力)が掲げられている。

2014年度に始まり, 2年連続で実施した本プログラムでは, 台湾銘傳大学において, ネイティブ講師らによる中国語4技能(読む・書く・話す・聞く)の集中トレーニングを行い, また台湾銘傳大学学生がTAとしてプログラムに参加し, 交流を図った。さらに, 中国語による文化体験活動にも参加し, 中国語のトレーニングに加えて, 台湾の歴史, 文化に触れ, 異文化理解を深めた。帰国後は研修参加者全員が第84回日本中国語検定4級, 3級を併願した形で受験した。中国語検定受験の準会場として鳥取大学会場の開設を検定協会側に申請し, 学生の受験に便宜を図った。また, 2015年9月では全学から12名の学生が研修に参加した。参加した学生は, 海外に働きたくなった, もっと中国語を勉強したくなった, グローバル社会を生きていく大きな資源を手に入れたと, 目を輝かして戻ってきた。帰国後, そのメンバーたちも11月22日に行われる第87回日本中国語検定4級(1年次を対象), 3級(2年次を対象)の受験に粛々と取り組んでいる。このように, 勇気を持って一步踏み出す学生にはそれをサポートする体制の構築を試み, 学生の大きな成長につながる取り組みを進めているのである。

6. 教員の中国語教育指導力のキャリアアップ

2015年9月2日から10日まで, 中国語専任教員が中国語教育の総本山である北京語言大学で行われた「東北大学 専門教育指導力育成プログラム 大学中国語教授法強化講座」に参加した。休日を含め前後10日間の密度の高い研修は, 参加者に多大な成果をもたらしてくれた。このプログラムには東北大学, 東海大学, 帝京大学, 鳥取大学, 神戸大学, 神戸学院大学, 宮城大学, 広島大学, 富山大学, 久留米大学, 九州工業大学, 日本女子大学, 仙台白百合女子大学といった13の大学から16名の教員が参加した。

9月3日(木)は午前が開講式が開かれた後, 午後, 戴悉心教授が「文法教育とその方法」において, 外国人を対象に行われている中国語教育についてのネーミングを, 「対外中国語教育」から「国際中国語教育」へと変遷した歴史について紹介した後, 「中国語文法研究」と「中国語教育文法」の範疇及びその関係を解説し, 中国語教育者にとって, 「中国語文法研究」より, 「中国語教育文法」の熟知が重要であるという見解を示した。

9月4日(金)午前は, 8:30から12:00まで, 3時間にわたり, 2名の担当者が, 中国での外国人学習者向けの中国語テキスト刊行の現況, HSK試験について紹介を行い, とりわけ, 目下中国で人気を博した反転教室について説明を行った。午後は故宮博物院見学であった。

9月7日(月)午前中は, 張莉教授による「音声教育とその方法」が行われ, 「声母」「韻母」及び「声調」といった分野の学習に見られる問題点を指摘し, 講義中における音声訓練の方略と手法を提示した。また, 受講者全員が音声教育の重要性と日本人学生への音声教育の難しさに賛同の声をあげた。

午後, 趙果教授が「語彙教育とその方法」について講義を行った。中国語語彙教育においては, 鳥取大学の学生を含む日本人学生は, 欧米の学生より, 漢字に慣れ親しんでいるため, いくつかのルールを理解しさえすれば, わりと学びやすい分野であると思われる。

9月8日（火）午前中、姜麗萍教授が「中国語テキスト編集概況」について、1950年代から50年間にわたる中国語テキスト編集の概要について総括的に紹介を行った。研修出席者全員が日本人大学生を対象とする初修中国語テキストの開発の必要性を痛感させられ、今後互いに連携・協力することが提案された。

午後、王治敏教授が「初級会話教育とその方法」について、自身が担当された授業で撮影されたビデオを見せながら講座を進めた。出席者全員がそのユニークな教育法に魅せられた。ただ、シャイな日本人大学生を対象に、そのような活発な授業の展開は難しいと思われる。

9月9日（水）午前中、梁彦民教授が「漢字教育とその方法」について講義を展開し、「何を教えるか」という問いから、漢字の起源、変遷、漢字の形成法、漢字の性質について系統的に解説を行った。また、「どのように教えるか」については、漢字の読み・書きの特徴、漢字の形と意味、字と語彙の異同、語彙の量、漢字の難易度といったカテゴリから解析を加えた。漢字を有する日本における漢字教育の展開に示唆が得られた。

今回の研修を通して、中国語教育に関するノウハウ及び最新情報を多く得られた。また、各国における中国語教育の共通性とその特異性、とりわけ、日本における中国語教育の特徴への再認識、鳥取大学における中国語教育の実践及び理論の構築に多大な示唆が得られたので今後の教育に生かしたいと考えている。

7. おわりに

グローバル化が進む中、日本国内でも学校や地域、職場で多言語・多文化の状態が進んでいる。このような時代を生きる日本の若者が自分たちの未来を切り開いていくために、他者との対話力、共感力、異なる言葉、異なる文化の人々と協働し、新しい何かを創造する力、この力を育むための外国語教育と交流事業を展開するのは教員の責務であると考えている。また、初修外国語教育は「教室の中」だけの努力では限界があるため、教室での講義を精力的にこなす他に、言語を使う現場につながる海外語学研修の立案企画や海外語学留学への派遣等々、学生に多様な選択の提供に努めなければならないと思う。つまり、授業を契機にし、海外語学研修（異文化体験、語学力の涵養）を通して長期留学（語学力の獲得）に発展させ、さらに就職・進路等を通して後輩にインパクトを与え、次年度の授業（契機）といったサイクルを循環させていく努力が重要である。

2012年9月の日本政府による尖閣諸島国有化から、日本と中国の関係は悪化の一途をたどっている。こういう時勢の下、メディア等からの影響による対中イメージが生じ、鳥取大学を含め、日本の大学では中国語を履修する学生が2割ほど減少した。一方、中国では日本への旅行をキャンセルした事態が続出していた。それでも、日本政府観光局の統計によると、その年でも142万5100人の中国人観光客が訪日した記録を残しているという。また、中国の若者の間では、アニメやドラマ、ファッションなどを通して日本へのあこがれが高まっており、近年、旅行等を通して日本を知る知日派も増えつつある。2015年度10月までに日本を旅した外国人旅行者は推計1,631万人に達し、2014年度1年間の数を上回り、過去最高を更新し、外国人旅行者の消費額は初の1兆円を超えたという。国・地域別の旅行者数として、中国人観光客は428万3,700人に上り、2014年度同期に比べて2.1倍以上増加した。また、同じく中国語圏の台湾からの観光客は311万4,800人に達し、2014年度同期に比べて30.8%増加したという。このような流れを汲み、政治に左右されない民間交流による日中両国のきずなを深め、真の国

民相互理解を構築していくためには、中国語教育等を含む中国政治経済、社会文化事情、日中関係を取り入れる講座等を通して、メディア等による皮相的な対中イメージの脱却を図り、日本と中国をつなぎ、中国を知る人材の育成が急務となっており、大学人、教育者として、その育成に協力したいと考えている。

崎原麗霞 (鳥取大学 国際交流センター)

郭伏良 (河北大学 国際交流与教育学院)

参考文献：

「全学共通科目 履修案内 平成27年度 鳥取大学」鳥取大学 2015

「CoReCa 2014-2015 国際文化フォーラム事業報告」国際文化フォーラム 2015

「www.jnto.go.jp 日本政府観光局 (JNTO)」

輿水優『中国語の教え方・学び方 - 中国語科教育法概説 - 』日本大学文理学部叢書 2005

郭春貴「大学における第2外国語の中国語教育の位置づけ」『中国語教育』2007

『東北大学の初修外国語教育 CAHE TOHOKU Report39』東北大学高等教育開発推進センター 2012

郭春貴「対日漢語教學的突破口」『国際漢語教學研究 總第3期』北京語言大学出版社 2014

胡金定「日本的漢語教育現状」『言語と文化』第18号 甲南大学研究紀要 2014